教育イノベーション・トライアル支援制度（第二期）
令和８年度実施プログラム 取組概要

※所属・職名は、令和８年 10 月１日時点の内容を記載しています。

1	機械翻訳と EFL 学習者のプレゼンテーション不安
申請代表者	バーガー　スティーブン（全学共通教育センター／実学英語講師）
共同申請者	なし
取組概要	本研究は、スピーチ発表課題において、機械翻訳（MT）が英語初級レベルの EFL 学習者の外国語不安に与える影響を検証したものである。事前・事後アンケート調査のデータを分析し、コミュニケーション不安、テスト不安、および否定的評価への不安の変化を調査した。その結果、MT の活用は発表に伴う不安の軽減と学習者の自信向上に寄与する可能性が示された。本発表へのフィードバックや本学会での意見交換を通して、授業で MT（機械翻訳）や AI ソフトウェアを適切に利用するための具体的な手順を開発する予定である。これにより、ソフトウェアの使用に伴う学習上の不安を効果的かつ倫理的に軽減する。また、この手順のガイドラインを、２月の京都産業大学全学共通教育センターPractical English Teacher Colloquium で同僚教員に紹介し、関心を持つ学内の教員にも共有する予定である。

2	文化・社会を「地図の上」で読み解く GIS 教育
申請代表者	熊野　貴文（文化学部／准教授）
共同申請者	なし
取組概要	本プロジェクトでは、DH ラボに ArcGIS を導入し、文化学部の学生を対象に、GIS によって文化・社会を空間的に読み解く教育を試行する。教員があらかじめ用意したデータセットを用い、京都文化基礎演習B の授業内で 12～1月に GIS 実習を実施する。聖地巡礼や京都の歴史文化を題材に、移動経路分析、可視領域分析、Living Atlas の活用等を実演・体験し、分析結果の一部を Story Maps で可視化する。短時間で ArcGIS の分析機能に触れることで、文系学生が GIS を文化研究の手法として理解する契機とする。

3	文化学を「見える・触れる形」にする DH 教育
申請代表者	成田　智恵子（文化学部／准教授）
共同申請者	須永　恵美子（文化学部／准教授）
取組概要	文化学部では、2026 年度の改組を契機に DH 教育を本格的に展開し、DH ラボや高性能 PC、デジタルアーカイブ等を整備している。一方、文化資源をデジタルデータとして作成・分析・編集する学修に比べ、その成果を具体的な形に表し、試作と改善を重ねる学修は十分に実践できていない。また、デジタル技術に不慣れで、未知の技術に苦手意識を持つ学生も少なくない。 本プロジェクトでは、文化を入口としたデジタルファブリケーション教育を実践する。既製品を利用するだけでなく、自ら考え、設計・制作する過程を学びの中心に据え、「試作―失敗―検証―修正―再挑戦」を繰り返す。グループで役割を分担し、互いに教え合いながら考察と改善を重ねることで、一人では挑戦しにくい学生も参加しやすくし、デジタル技術への苦手意識の軽減を図る。文化資源の調査・観察からデータの作成・編集、造形、共有までを一連の学びとして接続し、文化に関する知識を「見える・触れる形」へ再構成する力を育成する。

4	文化学部英語コース（KEEN）１期生チームビルド・プログラム
申請代表者	小川　知恵（文化学部／准教授）
共同申請者	加野　まきみ（文化学部／教授） ヒューバート　ラッセル（文化学部／准教授） ペレッキア　ディエゴ（文化学部／准教授） ジェリー　フアン（文化学部／准教授） アイシャ　トリ　アスタリ（文化学部／非常勤講師）
取組概要	本学部の英語コース「KEEN コース（KSU English Engagement Network）」は、3ヶ月以上の在学留学を必修とする新規プログラムであり、1期生 13 名は現在その第一歩を踏み出したばかりである。文化学部3学科横断で履修可能な本コースは、コース名称が体現する“Engagement”と“Network 構築”を、留学前の早い段階から体験的に実践する機会が不足しているという課題意識のもと、2つのイベントを実施する。一つ目は、10 月にハロウィンのパンプキン（ジャックオーランタン）を作成する。留学生を招き、11 号館の教室で実施する。二つ目は、11 月に半日のリトリートを試行する。学外の大学施設（町家学びテラス西陣）にて、LEGO やゲームなどを用いたグループ形式のチームビルディング活動を実施する。実施後は効果と課題を振り返り、他の留学必修プログラムにも応用可能なモデルケースとして学内に共有することを目指す。